生死
浮轉 玉數神

七

ヘ13
984
7

遠門 984 7

人情奇縁言葉花 中巻

江戸 東里山人著

第七回

実相真如の秋の月ハ
愚痴の暗を照す
煩悩の郭菩提涅槃の路ハ
風ハ妄執の雲を拂ハ是生滅法の海ハよく
生滅くに己の車ハ細の山を
越て寂滅為楽の八相ハ乃ふらるる偏へふ

佛の願力によるものなれバ百草ハ花に宿て
すゞしく見浮世ハ蝶の夢にぞありけるとなに蒙世
法師ハ十七年以前武蔵國宮戸川の旧舎を捨
て出家遁世の身となり相州鶴が岡の神前に通
夜して霊夢に潮あるを悟の足利旗日記の趣
に出現して夫より西國巡拝の志願に絶ゑ名
智山より濃州谷汲まで歩くこと十ヶ國その后
法二百四十七里余の行路をなし又秩父坂東の

札所を経巡りいかも遥けき陸奥の外が濱
なる呼子鳥覚束なくも鄙にねびのかはらくし
の果までも隈なく尊き霊場を伏拝み
軒端に宿る夜の佗つき木峠に蹲踞宿るの
悲しき月寝ざめる夢の庵に山谿跡絶てとも
或は饑へ飯る折もあり兼て喰経照するの日に
愛き渉を分佗て山の遠に宝海を敷と
責修時もあり仏の外に鷲の一郷ぞ秋の夕暮る

海〳〵場ふ糸を引ぐへ桐の種ふ羅き花ふ浮
立並への胡越関の戸の閉を行く〳〵暁きの鶏
根むけるふ伴ふ伴ふ道々ふふ鬼と連立あど日
毎ふ換る旅の光景一樹の蔭の舎る者宮殿
一汐の源道の光別離飽厭生ひの六尺輪
田柳ふそどりまふ結搭無ふくまふの色さみど
憂るのそどまるる雪ふ伊勢國雲津の
宿より伊賀路へ越る道を要ふ胄越といふ方

ふふ三海とふ搭あり馬ふふ孤の杜と名付
松山あり道沖と松坂の宿ふ〳〵た在
る二里宛の海乃あり美世法師ふ見独せる和
ありとて三名式國の霊人仏霊場名而回ふを手
覚〳〵て尚布引の滝を一見せどやト式胄越へ
さ〳〵まりるふふ胄山の樒ふ奥系双びあ宛
寺あり住持の僧も者宛と云へく蛍ふ津の八
重巻く庵ふ小鰐の音を乱〳〵軒端ふ

ふ傾きて夢ふ鄭の香を焚く魚尾もうぜよ
彼らんと月常傾の所内を挑ぐうとさすがふ
ぞ〜くる氏灵場をえん〜がく〜働ある在家
ひくことの中ゑ残事ねるふさんふべきよ是まで来
の古僧家人とあくまうく傾のべきよ〜
いひて氏寺ふ入うあくどれらの墓朝入きあて彩
宗ろくあらず解うのゆ少ふ呉いてうらふ中〜
悔ひぞうあく今ちや傾彩の汐法日彩まで

さぞ
宮あて妖怪あんと出るあやト人怖足をあ〜く
ものんし岡寺と呼ぶ境内の墓一ト摘さうとのとう捨る
者あうしト絞うくれべ美世法陀い眉を頻寄わ
傍のさうどふ悔〜くとも今墓一ト疾我ふ氏法寺を
貸のあまとうのあぞ人〜是を内て怨事家まの八
義安きうふさべまでも呉今中ごく怪〜き所
あんべ平ふ古無用とふうくうふ美世ふ安いまず
苦の鄭八さうのあうら況ふ経あいふ惜身命ふ

求名利と説まうて捨ん命の惜うらずにさえ
あり法燒を挑こゝ死のこゝ孫ゝ尼ゝ孫之
孫四ゝ拔のびろれば依ハ法方まゝ〻ゝ仮初ゝ足
ゝえまゝゝせ蟹の風洋ゝあるゝこゝ法師の
たゝゝ出ゝゝれとゝ油燒ん抹香なんど布施ゝ好
て尚ありばまゝゝ妻の中ハ輝奥の法師もあるゝのゝ
あゝ嘶と拝知を偽ゝるゝ彩て義世法師ハ布
施の物拔ゝゝ仏ゝゝゝ穢ゝる蓮墨を片代ゝ

掃ゝ除ゝ看経ゝゝゝゝゝ時移身ゝ疲ゝ四ゝ
ゝ向ゝゝて煩悩の雲きゝびてゝゝれぬゝゝの
月の彩祝会の嵐ゝずゝとんも滝ゝ拔り
ゝら庫裏の方より蓑ゝ煙ゝる火の塊ゝゝ
浮彼離と飛来ゝゝ水堂の門ゝ入ゝ竿の如く
綱ゝゝり宙宇と静ゝ彩ゝゝ拔ゝゝ又ゝゝ凝ゝの
玉とゝゝゝ飛巡ゝ篠ゝ紛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
紫ゝて弟ゝ砕星のごゝゝゝ散て

消失てうつ爰世八繁く毫色なく古墓なん
孤狸の作悔ふ殺ひ色と流転ふ尚ふを流して
赤さうふふ又庫裏の方より静こと歩き来る
若ありその形容紡絆として紫色拮搗さる婦人
の面繋ぎく肩ふ乗うて縷より下ハ血ふ深さるぶ
懐中ふ赤ちゃを抱きて爰世ぶ泥ふ跪きて
涙くと立悔むふ爰世その容貌を注くぐと
ふて偽ハ孕る婦人の死して屋女とのう武者と

迷ひ寄るヤト香炉捻り曩謨の雫のよ向ふ
仏界を祈よトありふれば屋女ハ泡き貢弐ふ
あら嬉くも今月ふ迷ひ〳〵一念の時る
時そいうぬと完ふ爰ふく泣涙ケ神祇ふ
ふ〳〵遂て吾倣るハ雲津の町の若ぶ夫トハ
故あつく爰九帝狐の為ふう親されくるの町ふ
トあづるハ式爰のふきのねの　その悔〳〵ふ揺うて妊娠の
すまるる山なれがくいう
胤月も待ずふ産の手分るぶ稚くの者

労ふ骸も弱き産びき精力もつきて終に命
いとはりしかども魂魄は土に帰りて安く産で
亡びきろと嘆き魂し一念力吾子の骸に通じ
てや悲あく生れいで親子二人とめぐれとも疾鶴
母は已人の報に入るに悟さにまよひ迷ふて産安
トあり孤独の苦患いまあらはせて此子の
身のうへを深ひびき人やあんと街に伶傳夜絃
徒遭人も邂逅にありても吾倆が姿に怖き

逃避去来さふ此るもん方俗もあく絵二方
あさふ此うへ道徳は寺の西まに捨ろう此子の身
のうへ深まんと佛に此ちふ品をいわ祈るあく出て
此るをいうえとすれば母の世ぐ品を家跡に弱る死
周障に逃げ去るの人は俗なる幾人とうふ報をたづ
ねらはるや出家に仏ざる行脚と漂猟くもて
来くて今八百日余の月日をろうろれば冥途
の仏の常もあく孤独を敵の山附あく歩に

道の辺の細の山臥ども氷う白むく
却つて紅ひの袈裟の中く吾さめ法華てゆく
るゆうと拝へ悔〜さに悔き今も仏の法の
命助けくるきる人へ死ハト涙ふ哽びて悲さ
ろ〜ふ又法師の言あふ来ろうのふとろんて今月
あ我ハトよろこび〜ぶつ〜言甲斐なきるう
ものやおんとさ紅ふ怪〜き火の魂ん法ん
ろ〜ろきるきるね法師のん中達ろるきん盃

ト嬉〜〜も又あり羅〜く偽ハ是まで連来まう
地獄の責もあう〜ふ吾るの乃ふ獣ざるん
のうち城ふ後とも拝ひひてん子の命お助け
なされろされ已ト法衣の神ふ祈り携り泣伏る
あぞ爰世も氏姫中弥を学〜く悔〜懺悔あう
山の中海の辺りふも地獄あうと倶舎論ふ法華
たり已も実ふ理りあるう今師ふこのせ弥
あるりのハ氏産女あり〜ト呂管義聖を悲〜く

楽が望みのごとく彼赤子を抱きそいうあるにて
云ふくきんとらの不産女は又うまれ涙不伏況を
思ひ入まいらせまいらせ死ん吾俤ぶ見る者京都の
小緒ふありと年ぶ子なる死給安産もなきさべ
我ふくまよと要ふあるなせーがその楽
しこも他とあり吾死したるを聞のよりも歎きうあ
しのるへふ思れず伝る悲ひの中まれば物乗
吾俤ぶ産女とありて安産せーるのよ我

告のひ出るを見のくぶ浜まで送て帰りくぶ
きらび浮世ふ望みこそ不思ト歎て義経へそれ物義
ぶ姿きるのありその見なる者の名ハ物ニといふぞじと
尋ねふ妻ハみやまを相ふ不来者奥あーて
稲荷ふ判ぞトサ者なあり浜ふその赤子ぶ母ふ渡
しる長ハ見の方ありくまーふ見えもあれば
物ニ嘆べるもあらずトふ最悲情ふ告ぞれば義経
悲ぶ思るるハ子細もあるまじふ伝のあるらも

親子八一せ今別るまゝ永劫都ゝ
八迎も叶ひねいとゝ乞ヨと法衣の袖
找掲げつゝスヤ〳〵眠る赤子の顔を又まれば妻
子ゆ〳〵おぎうます是ぶ吾子の顔の又母さま
まぶ御ん父堂とも乞ゝ〳〵お人〳〵て氏母ぶ稚の苦
患をきつゝてくるヨ乞ゝ伯父さま叔母さま
実の父さま母さとお叔母さま
ゆ人あるを楽〳〵ふ人の中あの苦〳〵もぎと

ぶつ〳〵ぶつ〳〵ぶつぶつ〳〵と帳を美世法師を
解多ゝ〳〵ぶつ〳〵スツクと立ち瞋志のゝ〳〵ぶん
悩の猛火ふ縛ひ容ハ血〳〵ふ染〳〵なぶら
煙ゝとゝふ消ゝ〳〵ハ熱れ者又凄冷かり〳〵
ぶくまゝも雑べきの武死出の山さ死立るゝと初
〳〵らむらん美世法師の禁堂ふ通夜
〳〵〳〵潮ぶる庭ふ出今ぶのひゝをまゝ赤子の
厄介のを好〳〵暁ゝの鐘と法とも義岡ち

城立出れば門の山々こゝ〻法師の多のうへ山伏
ぞやと指の在るを見れば死ろを入て門前まで来
たり此時を見て傍の者ども明り多へ
ろうコハ法師の元人あるぞ伏ほの重人いう
ある上人智徳あて法せるぞやト地ふ跪踞所
我按摩を寄りて忍れ見れば美女人おびく
〻安拙法さるぞ〻此寺の妖怪ハ産女トいふ
りう〻此ろを人ふ塚こ一念ありて某此所へ来の